

## 五言律詩の平仄式、及び拗句について : 教学上の観点から

古川, 末喜  
佐賀大学教養部 : 助教授

<https://doi.org/10.15017/9696>

---

出版情報 : 中国文学論集. 21, pp.13-34, 1992-12-31. 九州大学中国文学会  
バージョン :  
権利関係 :



# 五言律詩の平仄式、及び拗句について

— 教学上の観点から —

古 川 末 喜

## （一）はじめに

唐詩は、我々日本人に最もなじみの深い中国文学の一つである。

しかし、唐詩とりわけ律詩を、普通に文学作品として鑑賞する場合、押韻は注意するにしても、全体の平仄配置にまで目を向ける場合は、そう多くはないようである。

もちろん、平仄を明らかにせずとも、ほとんどの場合、作品の主題やモチーフ、特徴、詩人の思想や人と為り等が理解できることは確かである。現にそうした作品論、詩人論ですぐれた論考はいくらでもある。というよりは平仄配置が明らかになったとしても、作品論、詩人論には反映されにくいという方が実際に即しているかもしれない。

恐らくこのことが平仄があまり顧みられない根本的な理由であろう。しかし、もう一方で、韻文の専門家を除いての話だが、一般的に見て、平仄の問題が敬遠されているフシがあるのも事実である。それは一体どうしてだろうか。

律詩の平仄式自体は非常に簡単である。××○○×、×××○○、○○○××、○○××○の四種の律句と、それがどのように連結されるかという反法・粘法、及び句末の平仄交替を知っておれば、とりあえず十分である。

しかしそれにもかかわらず、律詩の平仄と聞いただけで何か消極的になりがちなのは、平仄式の原理・原則が難しいからというのではなく、その原理・原則に様々な例外や許容事項があり、その説明の仕方が非常に難解になっているからだと思われる<sup>[1]</sup>。

例えば、最近の漢詩入門書に載せる平仄式を次に掲げてみよう<sup>[2]</sup>。

●●○○○●、●○○●●○。

●○○●●●、●●●○○○。

●●○○○●、●○○●●○。

●○○●●●、●●●○○○。

○は平字、

●は仄字（以後×で代用）

●○は平仄両用、◎は平韻

たしかに、これには、一つの表で済ますことができるという便利さはあ

るが、このいろんな記号が散りばめられた複雑な平仄式を見れば、たいいていの初学者がおじげついでに違いない<sup>[3]</sup>。

また、この方面のバイブル的存在である王力の『漢語詩律学』では、例外・許容事項が、次のように定義してある<sup>[4]</sup>。

$\times \times \bigcirc \bigcirc \times = a$ 、 $\bigcirc \bigcirc \bigcirc \times \times = b$ 、 $\times \times \times \bigcirc \bigcirc = A$ 、 $\bigcirc \bigcirc \times \times \bigcirc = B$  という前提のもとに、

甲種拗：A a bの律句の第一字が拗したもの

乙種拗：第三字が拗したもの

丙種拗：B 律句の第一字が拗したもの

子類特殊形式：b 律句の第四字が拗したもの。「特拗」とも呼ぶ

丑類特殊形式：a 律句の第四字が拗したもの

これは、甲乙丙・子丑などの名称にまず違和感があり、さらにそれがどの型の律句の、第何字目の拗かを記憶で結び付けねばならず、初学者にとってなじみやすいものとは決して言えない。

このように律詩の平仄式の例外・許容事項（拗句）をめぐる問題は、現状では必ずしも単純明快な説明法になっていない。そこで、この問題をもっとすっきりと説明する方法がないものか、という問題意識から出発し、私なりの理解の仕方を提示してみたのが小論である。

なお小論で、近体詩の中でも五言律詩のみを取り上げたのは、絶句は律詩を半分にすればよく、七言詩は五言詩の上に二字を加えればよいからである。いずれも、五言律詩の平仄式の中に近体詩の平仄のエッセンスが含まれており、それさえ理解しておけば、後は応用がきくからである。また押韻については、すべて律詩としての押韻法を守っているとの前提のもとで話をすすめる。

## （二）平仄式モデルの求め方

ここに五言八句一韻到底の詩があるとする。この詩が律詩であるかどうかを、平仄上からどのように判断すればよいか。またここに五律に分類された詩があったとする。それが、なぜ、どのようにして律詩であると言えるのか。またそれは平仄上、どれぐらい整った律詩と言えるのか。これらの間に答えるためには、まず評価・検討する際の基準となるものが、しっかりと確立されていなければならない。そしてその基準なるものは、曖昧且つ複雑であるよりは、単純且つ明晰であることが望ましい。

五律の場合、その基準となる平仄式は、周知のように次の二つのみである。

仄起式	××○○×	平起式	○○○××
	○○××○。		×××○○。
	○○○××		××○○×
	×××○○。		○○××○。
	××○○×		○○○××
	○○××○。		×××○○。
	○○○××		××○○×
	×××○○。		○○××○。

この二つを頭にたたき込んでおけばよいのであるが、何の規則性も無しにこれだけを丸暗記するというのはそう容易なことではない。だが実際にはその必要はなく、冒頭でも触れた四種の律句をまず覚えておけばよいのである。ただ最低限その〈四律句〉だけは、理屈抜きで丸暗記しておく必要があるし、そうでなければ実践的にも役立つ<sup>[5]</sup>。

さてこの四律句は、必ず××○○×は○○××○としか対にならず、○○××は×××○○としか聯を作らない。この二つの律句からできた一対を律聯と呼び、それぞれ上句の第二字目の平仄がいずれであるかによって、

仄起律聯	┌ ××○○×	平起律聯	┌ ○○○××
	└ ○○××○。		└ ×××○○。

と呼び慣わしている<sup>[6]</sup>。この律聯の構成は非常に分かりやすく、平と仄が上句と下句で完全に裏表になっていることが一目で見取れる。従って、この二対の律聯を頭に入れることは決して困難ではないはずである。先の四律句は、このような二組みの聯の形で覚えておくのがよい。

さて、それぞれの聯は第何字目でみても上下句の平仄が逆になっていたわけであるが、第二字目に特に着目して、そこの平仄が一つの聯の中で対になることを反法と呼んでいる<sup>[7]</sup>。この反法が、律句が律聯を構成する際の原理であるが、もう一つ、句末の平仄交替の原理も忘れてはならない。ただ第五字目の平仄が交替していくというのは、句から聯が作られていく場合だけに限らず、一首全体を貫く原則でもある。

かくて四つの律句から二つの律聯が出来るわけだが、次にこの聯と聯が結合して一つの絶（律絶）という単位を作る。この聯どうしが連結されて行くときの原理は、粘法と呼ばれる。粘法とは、前の聯と後の聯の連結した部分の第二字目が、それぞれ隣りどうしで同じ平仄になること、そのような聯どうしの連結法のことを言う。従って、四律句では、

┌ ※※※※、  
└ ○○××○。

|| 粘

┌ ○○○××、  
└ ※※※※。

┌ ※※※※、  
└ ×××○○。

|| 粘

┌ ××○○×、  
└ ※※※※。

の二つの粘法のみである。これによって、絶の単位は、

仄起絶

┌ ××○○×、  
└ ○○××○。

平起絶

┌ ○○○××、  
└ ×××○○。

┌ ○○○××、  
└ ×××○○。

┌ ××○○×、  
└ ○○××○。

の二つしかないことになる。

律詩は、この同じ型の絶を二度繰り返したものだが（或は、粘法で次々と律聯を連結していったものと言っても同じ）、粘法を知っておれば、この二種類の絶は自動的に作られるので、それをそのまま覚えこむ必要はない。結局、初めに述べた四律句、反法、粘法、句末の平仄交替の原理さえ知っておれば、律詩の純粹な平仄式を機械的に組み立てることが出来るのである。

以下、それを念のために四律句の模式上で試みしてみる。

例えば、ある任意の句が偶数番目の句であったとする。偶数番目の句は押韻句であるから、一聯の中では下句、その第五字目は平声、のはずである。従ってその律句は、○○××○か、×××○○かにしぼられる。第二字目の平仄を見て、平なら○○××○となり、仄なら×××○○と決定される。（第二字目の平仄が確定し難いときは、前後の句の第二字目をにらみながら見当をつけていく）

もし第二字目が平で、下句が○○××○と決定されたなら、その上句は、反法で×××○○、又は××○○×となるが、句末の平仄交替で××○○×に確定される。（或は律聯は、互いに裏返しの方が一対になったものと覚えておけば××○○×の句式がすぐさま出てくる。このやり方が早くて実用的。以下も同じ。）

以上から律聯の模式が、

┌ ××○○×、  
└ ○○××○。

と決まれば、次は粘法によって、後に続く聯ならその聯の上句が、○○○××か、○○××○かの二つの可能性にしぼられてくる。そこで、句末の平仄交替の原理を用いると、○○○××に決定される。そしてその下句は、反法と句末交替（もしくは裏返し句型）で、×××○○と決まる。

かくてその他の場合も上記の要領で、四律句を材料に、反法、粘法、句末交替の原理を臨機応変・縦横無尽に駆使しながら、その律詩の平仄式の理想型を導き出していけばよいのである。

### （三） 拗の表記式

以上は、その律詩がモデルとしている平仄式を見極めるための方法である。このモデルとなった平仄式はあくまで理想的な形で、現実の律詩はこの理想型からはずれることが多い。そういった理想の平仄配置を踏み外すことを「拗する」と言い慣わしているが、実際には、一つの拗もなく理想型のままに作られることの方が、むしろ極めて稀なほどである。

さて、拗、即ちそのモデルからはずれた例外や許容事項には、さまざまな場合が認められており、しかもその拗につけられた名称は、冒頭でも触れたように、必ずしも初学者に分かりやすいものとはなっていない。そこで、ここでは以下のような呼び方を提唱する。

五言句では拗の出現する可能性のある箇所は、機械的に考えて第一字目から第五字目まで五箇所ある。そこでその拗が第何字目で発生したかによって、その拗の名前をそれぞれ第一字拗、第二字拗、第三字拗、……などと呼ぶことにする。

また、実際の詩における拗の発生状況を、例えば〔1-1・3〕などの数式表記の方法で表わすことにする。〔 〕内のハイフンは上句と下句を分け、数字が表記してある場合はその字数目の所で拗していることを示す。従って拗していない所は数字も表記されない。上記の〔1-1・3〕は、上句に第一字拗、下句に第一字拗と第三字拗が発生していることを意味する。単句のみで示す時は、例えば上述の下句は〔1・3〕などとする。

さらに仄起聯をzで、平起聯をpで表わし、それぞれ聯内の上句をa、下句をbで示すことにする。こうして上記の〔1-1・3〕が仄起聯ならば、それはz〔1-1・3〕と表記でき、その上句はza〔1〕、下句はzb〔1・3〕と表わせる<sup>[8]</sup>。一首全体は仄起式ならzpzp、平起式ならpzpzとなる。

### （四） 第一字拗

第一字拗は、拗の中でも最も軽い拗とされる。従って、頻繁に出現し、拗する拗しないは完全に自由である。ただしこれは〇〇××〇式を除いて

の話であり、〇〇××〇式の場合はこれと正反対に最も重い拗とされる。従ってこの場合、拗する時には必ず救わなければならない、拗して救わないというのは極めて異例とされる。

〇〇××〇式以外での第一字拗は王力の甲種拗に相当する。

今ここに単句次元での第一字拗の出現状況を、『唐詩三百首』中の五言律詩七九首によって見てみると、次のような表になる。(但し表中には第一字拗と関連の深い第三字拗も記載してある。)<sup>[9]</sup>

z a [0]	××〇〇×		約 71句
z a [1]	〇×〇〇×	約50句	計約 66句
z a [1・3]	〇××〇×	約16句	
z a [3]	×××〇×	約10句	計約 26句
			総計約 76句
z b [0]	〇〇××〇		約117句
z b [1]	×〇××〇	0	計約 12句
z b [1・3]	×〇〇×〇	約12句	
z b [3]	〇〇〇×〇	約18句	計約 30句
			総計約 30句
p a [0]	〇〇〇××		約 34句
p a [1]	×〇〇××	約54句	計約 55句
p a [1・3]	×〇×××	約 1句	
p a [3]	〇〇×××	約21句	計約 22句
			総計約 76句
p b [0]	×××〇〇		約 48句
p b [1]	〇××〇〇	約59句	計約 61句
p b [1・3]	〇×〇〇〇	約 2句	
p b [3]	××〇〇〇	約 1句	計約 3句
			総計約 62句

このささやかな調査からも前述のことが確認できる。まず〇〇××〇式律句 z b を除いて考えると、他の三律句では、第一字だけを拗している句の総計が約163、何も拗しない三つの純粹律句の出現数が約153で、むしろ拗する方が若干多くなっている。さらに第三字拗との複合拗約19も入れると、第一字に関する拗句は約182となり、その差は顕著になり、拗する方が拗しないものより確実に多くなってしまふ。

このことから z b [〇〇××〇] を除いた三律句では、第一字拗がいかにか軽いかかわかる。もっと極端な言い方をすれば、その三律句では第一字は拗しないより、拗する方がより普通とまで言い得るかもしれないのである<sup>[10]</sup>。

さて、z b [〇〇××〇] で、第一字目を拗して仄にする必要がある場合は、必ず第三字目も拗して〇〇××〇 [1・3] とする。もし第一字目を拗するだけなら、×〇××〇となり、この拗句は近体詩で最もタブーとされるという。それがどれくらいタブー視されるかという、王力によれば、『全唐詩』全巻中でわずか一例しか犯したものがないという程である<sup>[11]</sup>。

ではなぜ、×○××○が、それほどまでにタブー視されるのだろうか。王力は、「韻脚の平声字は固定したものであり、これ以外では句中にはただ一個の平声字が残るだけで、孤平は詩家のタブー視するところだから」<sup>12)</sup> というが、これをもう少し、私なりに敷衍してみると次のようになる。

この句の特徴は、単に第二字目が孤平という所にあるのではない。もし第二字目が孤平というだけなら、○○○××式律句の拗句である×○×○×や×○×××もそうであるが、前者は時々出現するし、後者に至っては拗句として公認されてさえいる。この句の特徴は、平声の押韻句であること、韻脚以外は第二字目だけが平声で、他は仄声であること、の二点である。ところで五言句は、一般に上二字と下三字とに分けられ、第二字目のところでは何がしかの断絶がある。朗誦でも第二字目で長くのばしたり、息継ぎをしたりすることが多く、韻律上目立つ部分と言える。よりによってその部分と韻脚だけが平声だと、その部分の平声と脚韻とがまぎらわしくなり、押韻の効果が薄れるからである。

### （五） 第二字拗

第二字拗は、律句としての資格を失うほどの重大な違反で許されない。もし拗すれば、二四不同、反法、粘法を犯すことになる。が、そもそも律詩に第二字拗はあり得ない。と考えておいて普通は間違いないであろう。

第二字拗であればまず必ず失対となるが、王力（前掲書百十三頁）は、失対の例は僅かに七例しか挙げることが出来ないと言う。その中の一つ、儲光羲「京口 送別 王四誼」（押韻は下平声十一尤韻・首句入韻）は、

江上 楓林 秋、○×○○○、p b [1・3]  
 江中 秋水 流。○○○×○、z b [3]  
 清晨 惜 分袂、○○×○×、p [3・4-1]  
 秋日 尚 同舟。○××○○。○  
 落潮 洗 魚浦、×○×○×、z [2・3-0]  
 傾荷 枕 駅楼。○○××○。○  
 明年 菊花 熟、○○×○×、p [3・4-2]  
 洛東 泛觴 遊。×○×○○。○

のように第三聯が z [2・3-0]、第四聯が p [3・4-2] と、〈律句の第二字目〉でそれぞれ拗している。王力は、この第二字拗が二箇所発生した詩を律詩と見なしているようであるが、少なくとも平仄上からは、この詩はほとんど律詩とは認めがたいものである。もしもこうした第二字

拗が認められるとするのなら、ある特別な意味を有する例外事項として取り扱われるべきであろう<sup>[13]</sup>。

また第二字目を拗すると失対になるのだが、逆に失対だからと言って、必ずしも第二字拗とはならないことに注意しなければならない。王力の挙げる失対の例を見てみると、ここで言うような、〈律句の第二字目〉を拗した第二字拗ではないものもある。それらは単句としてはそれぞれ律句を用いているのだが、〈律詩としての句結合＝律聯〉が出来ていないだけである。例えば、杜甫の「憶弟」（押韻は上平声五微韻）、

且喜 河南 定、	××○○×	—	z a [0]
不問 鄴城 圍。	×××○○。	—	p b [0]
百戰 今 誰在、	××○○×	—	z [0-0]
三年 忘 汝婦。	○○××○。	—	
故園 花 自發、	×○○××	—	p [1-1]
春日 鳥 還飛。	○××○○。	—	
斷絕 人煙 久、	××○○×	—	z [0-3]
東西 消息 稀。	○○○×○。	—	

この詩は第一聯が失対しているが、第一聯そのものは上下句ともきれいな律句で構成されている。これは、第一句に p a [○○○××] が来るべきところが z a [××○○×] が来ているだけで、これを以て〈律句の第一字目、第二字目、第四字目〉が拗しているとは見なさないのである。この詩は第一聯の失対を除けば、後はほぼ完璧な律詩である。従って杜甫が稀に行う意図的な破格として、例外的に律詩の中に入れてよいものである<sup>[13]</sup>。

また失粘についても同様で、失粘だからといって、第二字拗だとは限らない。失粘は、近体詩としての律聯どうしの組み合わせ方を規則どおりには実行していないもので、律聯そのものの内部構造を破壊しているわけではないからである。

例えば、次の陳子昂の「送別 崔著作 東征」は、『唐詩選』の五言律詩の部分に収められている詩であるが、第一聯と第二聯、及び第三聯と第四聯（起聯・領聯・頸聯・尾聯を便宜的にこう呼ぶことにする）の結合部分でそれぞれ失粘している。

金天 方 肅殺、	○○○××	—	p [0-0]
白露 始 專征。	×××○○。	—	
王師 非 樂戰、	○○○××	—	p [0-1]
之子 慎 佳兵。	○××○○。	—	
海氣 侵 南部、	××○○×	—	

辺風 掃 北平。 ○○××○。 — z [0-0]

莫賣 盧竜 塞、 ××○○×、

帰遼 麟閣 名。 ○○○×○。 — z [0-3]

この詩で、第二聯の上句は、z a [××○○×] が来るべきところであるのに、p a [○○○××] が来ている。だからこれを機械的に考えると、第一字、第二字、第四字が拗しているように見える。しかし実際にはこれを第一字拗、第二字拗、……などとは言わない。これは、仄起律聯が来るべき所に平起律聯が来ているにすぎない。各々の聯自体は、かなり模範的な律句を用いて、反法がきちんと守られたきれいな律聯が出来ているのだが、聯と聯とを結ぶ粘がうまく出来ていないだけのことである。

失粘は、拗格すなわち一つの格律として、律詩の中に入れられことがあるが、失対はほとんど律詩とは認められていない。これはなぜそういうふうに言えるのかというと、律詩への発展の道は、まず二四不同を備えた律句が出来、次に六世紀に反法によって律聯が整えられ、最も遅く七世紀に粘法が発見されて、はじめて律詩が完成したという歴史的経緯があるからである<sup>[9]</sup>。律詩の必要条件は、律句ではなく律聯であり、律聯が出来れば、最も遅く出来た粘法は大目に見られるのである。

## （六） 第三字拗

王力の言う乙種拗に相当する。

第三字拗は第一字拗、又は第四字拗と密接に関連している場合（拗救）がある。ここでは第一字拗との関連についてだけ取り上げ、第四字拗との関連については第四字拗の項で述べることにする。

第三字が拗すれば、下三字の部分で孤平、孤仄、平三連、仄三連が出現し、あまり好ましいこととはされない。従って第一字拗に比べて、第三字拗は少ない。その中でも特に平三連は、古体詩の平仄リズムとされ、近体詩ではタブー視されている。

しかし実際には、第三字を拗したものも少なくない。今日、律詩と見なされているものから第三字拗を調べてみると、四律句のどの句式においても第三字拗が出現している。このことは、結果としてみれば第三字拗は許されるということである。但し、結果的には許されるとは言っても、その許容度には、句式によって自ずから違いがある。しばしば出現する句式は、その拗はほとんどフリーパスで、滅多に出現しないものは、かなりタブー視された重い拗だということである。そのことは『唐詩三百首』の五律中

に於てもよく示されている。

ここで前掲の表を参照していただくと、第一字拗と第三字拗とでは、第一字拗が第三字拗より出現数が多くなっていることが確認できる。つまり律句の出現総数約270を100とすると、第一字に関する拗句の出現回数約194は約70、第三字に関する拗句の出現回数約81は約30となっている。しかも多寡の差はあるものの、いちおう四種の律句でみな発生している。

また下三字の平三連が重大なタブーであることも、この表から確認できる。下三字の孤平、孤仄、仄三連の出現数は、約26、30、22とあまり大きな差はないのに、平三連が約3と、際立って少ない。これについては鈴木松江（注【11】に既出）の調査結果も、『唐詩選』五律・排律中で僅かに三首のみとなっている<sup>[6]</sup>。

また律句の出現数約270に対して、第一字または第三字で拗している句が約244で、律句と拗句の出現数にはあまり大きな差はない。これに第四字拗50弱（後述）を加えるとこの差は逆転し、律句より拗句が多くなる。つまり律詩といえどもその大半は、拗句からなっているということになるのである。

### （七） 第一・三字拗に関する複合拗

以上から、単句次元では軽重・多寡の差はあるもののすべての律句で第三字拗が出現し得ることがわかった。では次に聯の単位ではどうであろうか。また第一字拗との関連に於いてはどうであろうか。

今、聯単位で第一字拗・第三字拗のすべての組み合わせを考えてみると、以下に掲げる表のように仄起聯、平起聯でそれぞれ十六通りずつあることになる。律詩においてこれらの句式が出現し得るのかどうかを見てみると、中井積善の調査によれば、一応すべて出現し得るということになる。

この表で、“約～回”とあるのは、『唐詩三百首』五律中の調査結果であり、“律兆”とあるのは中井積善『詩律兆』（鳳出版、日本詩話叢書第十卷所収）に用例が拾ってあるもの。“兆附”とあるのは、用例が無いが、極めて少ないか、（邦人のよく誤用するものとして）『詩律兆』の各篇末に附されているもの。“王力”とあるのは、王力の『漢語詩律学』が拗救として認めているものである<sup>[7]</sup>。なお丸数字は聯内の平と仄の比率を示す。

五言律詩の平仄式、及び拗句について（古川）

◇〔仄起聯〕

z〔0-0〕	××○○×、○○××○	⑤：⑤	約65回		
z〔0-1〕	××○○×、×○××○	④：⑥	0	兆附	
z〔0-3〕	××○○×、○○○×○	⑥：④	約5回	律兆	
z〔0-1・3〕	××○○×、×○○×○	⑤：⑤	約1回	律兆	王力 #1
z〔1-0〕	○×○○×、○○××○	⑥：④	約48回		
z〔1-1〕	○×○○×、×○××○	⑤：⑤	0	兆附	
z〔1-3〕	○×○○×、○○○×○	⑦：③	約2回	律兆	
z〔1-1・3〕	○×○○×、×○○×○	⑥：④	0	律兆	
z〔3-0〕	×××○×、○○××○	④：⑥	約4回	律兆	#2
z〔3-1〕	×××○×、×○××○	③：⑦	0	兆附	
z〔3-3〕	×××○×、○○○×○	⑤：⑤	約3回	律兆	王力 #3
z〔3-1・3〕	×××○×、×○○×○	④：⑥	約3回	律兆	王力 #4
z〔1・3-0〕	○××○×、○○××○	⑤：⑤	0	律兆	#5
z〔1・3-1〕	○××○×、×○××○	④：⑥	0	兆附	
z〔1・3-3〕	○××○×、○○○×○	⑥：④	約8回	律兆	
z〔1・3-1・3〕	○××○×、×○○×○	⑤：⑤	約8回	律兆	

#1〈唐詩選67首中0句〉 #2〈唐詩選五律排律100余首中6句〉 #3〈唐詩選中3句〉 #4〈唐詩選中14, 5句〉 #5 鈴木松江に1例（以上〈〉内は鈴木松江前掲書の指摘）

◇〔平起聯〕

p〔0-0〕	○○○××、×××○○	⑤：⑤	約18回		
p〔0-1〕	○○○××、○××○○	⑥：④	約16回		
p〔0-3〕	○○○××、××○○○	⑥：④	0	律兆	兆附
p〔0-1・3〕	○○○××、○×○○○	⑦：③	0	律兆	兆附
p〔1-0〕	×○○××、×××○○	④：⑥	約24回		
p〔1-1〕	×○○××、○××○○	⑤：⑤	約30回		王力
p〔1-3〕	×○○××、××○○○	⑤：⑤	0	律兆	
p〔1-1・3〕	×○○××、○×○○○	⑥：④	0	律兆	兆附
p〔3-0〕	○○×××、×××○○	④：⑥	約6回	律兆	
p〔3-1〕	○○×××、○××○○	⑤：⑤	約13回	律兆	
p〔3-3〕	○○×××、××○○○	⑤：⑤	約1回	律兆	兆附 王力
p〔3-1・3〕	○○×××、○×○○○	⑥：④	約1回	律兆	兆附
p〔1・3-0〕	×○×××、×××○○	③：⑦	0	律兆	
p〔1・3-1〕	×○×××、○××○○	④：⑥	0	律兆	
p〔1・3-3〕	×○×××、××○○○	④：⑥	0	律兆	兆附 王力
p〔1・3-1・3〕	×○×××、○×○○○	⑤：⑤	約1回	律兆	兆附

先に見たように、第一字拗に関しては押韻句第二字を孤平にする  $z b [1]$  が極めて重い拗であったのに対し、第三字目では下三平をもたらす  $p b [1x \cdot 3]$  ( $x$ は任意に1または0) がタブー視されていた。その二つを比べると、やはり  $z b [1]$  が  $p b [1x \cdot 3]$  よりずっと深刻な拗である。そのことはこの表で、 $z b [1]$  が兆附にしか見えないのに対して  $p b [1x \cdot 3]$  が時々出現していることから首肯できる。

このことからこの二つの拗を強いて区別すれば、 $z b [1]$  は律詩としては許容範囲外としたいもの、 $p b [1x \cdot 3]$  はかろうじて許容範囲内に入れるものと言うことができよう。こういう立場に立てば、前掲表で  $z b [1]$  の句を持つ聯  $z [1x \cdot 3y - 1]$  ( $x, y$ は任意に1または0) を除いて、その残りすべてを律詩を構成する聯として認めてよいことになる。つまり押韻句第二字孤平を除きさえすれば、第一字拗、第三字拗が発生しても何とか許されるということである。(所謂一三不論)

さて、第一字拗と第三字拗は、一句内、或いは一聯内で様々に複合して現れることが少なくない。この現象のなかでも特に第何字目かが拗して元の平仄の比率が破られた際、どこかもう一箇所故意に拗して、元来の平仄の均衡を取り戻そうとしている場合を普通、拗救(救拯)と呼びならわしている。その時、一句内で処理される場合と、聯内(対の句)で処理される場合とがあり、それぞれ本句自救と対句相救(王力の呼称法を借用)と呼ぶ。

ところが前掲表からすると、第一字拗・第三字拗等の複合拗に関しては拗救という考え方はほとんど意味がないと言える。

例えば、 $p [3 - 3]$  は対句相救型の拗救として公認されているものである。確かにこの場合、上下句に同時に第三字拗が出現したことによって、平仄の均衡は  $5 : 5$  と保たれている。しかし本句自救と対句相救を複合したため、却って  $4 : 6$  と不均衡になってしまったのも少なくない。公認されているものでも、 $p [1 \cdot 3 - 3]$ 、 $z [3 - 1 \cdot 3]$  がある<sup>[19]</sup>。

逆に  $p [3 - 1]$ 、 $z [1 \cdot 3 - 1 \cdot 3]$  は、平と仄の比率は  $5 : 5$  で、出現数も決して少なくない。それにもかかわらず拗救として公認されていないのは不公平である。

また対の句にまたがって拗が出現しても、それは対句相救ではなく、第一字拗、第三字拗がそれぞれ勝手に出現していると考えても全く問題無し、むしろそう考える方が正しい場合もある。というのは、 $z [1 - 3]$  など形としては対句相救だが、救うどころか逆に  $7 : 3$  となって不均衡を拡大させているものもあるからである。さらに非常に例の多い  $p [1 - 1]$

などは、王力の言うように詩人の意識の中では対句相救だったかもしれない。しかしこの場合でも、 $p [1-1]$  と同時に  $p [0-1]$ 、 $p [1-0]$  など多数存在することからすると、やはり各句で勝手に拗が発生していると考えほうが妥当である。

このように現行の拗救という考え方、その語の用い方はあいまいであるから、以上を踏まえて、第一字拗、第三字拗、及びその複合形式は、一句内でも聯内でも発生しうるものであり、その中でもたまたま平仄の均衡が回復されているという特別な場合を、特に拗救と呼ぶ、と言い換えたほうがよさそうである。畢竟「拗救」は、様々な拗の中の一つの自己完結的な特殊形式にすぎない<sup>[10]</sup>。

さて、ここで『唐詩三百首』五律中での第一字拗、第三字拗、及びその複合形式の出現回数を次のような表にまとめてみる。

	仄起聯 z		平起聯 p		
律聯	65		18		
第一字のみの拗聯	48	71	70	85	第一字拗を含む聯
第一・三字の複合拗聯	23		15		
第三字のみの拗聯	12	35	7	22	第三字拗を含む聯
拗聯の合計	83		92		

この表から次のことが確認できる。

- (1) 第一字、又は第三字、又はその複合等、何らかの形で拗している拗聯が、かえって律聯よりも多い。
- (2) 第一字拗を含む聯がどこも拗しない律聯より多く、第一字拗がいかに軽いかということがこれからも分かる。第一字拗の軽さは単句次元でも同じ傾向にあった（押韻句の第二字孤平を除く）。
- (3) 一字拗のみの聯と第三字拗のみの聯とを比べても、また第一字拗を含む聯と第三字拗を含む聯とを比べても、いずれの場合も第一字に関する拗が、第三字に関する拗よりも多いと言える。この点では単句次元でも、聯次元でも同じ傾向である。

以上の三点は、単句次元で言えたことが聯単位でも言えるということか、もしくは単句次元でその傾向にあったことが聯単位でより顕著になったということである。

(八) 第四字拗

第四字目が拗すれば、二四不同の律句の基本原則が乱れる。従って第四字拗は一般的に言って重大なルール違反である。だから第一字拗、第三字拗の全対数に比べると、第四字拗全体の出現数は一番少ない。但し、特殊な場合の第四字拗は認められている。所謂王力の子類特殊形式、丑類特殊形式である。しかもその特殊形式の出現回数はそれほど少なくはない。その特殊形式はいずれも単独の拗ではなく、拗したら必ず第三字で救わなければならないという拗救方式である。本句内第三字で救う本句自救型（子類特殊形式）は、句単位で p a [ 3・4 ] と表記でき、下句の第三字で救う対句相救型（丑類特殊形式）は、聯単位で z [ 4 - 3 ] と記される。しかも両者とも上句（非押韻句）の第四字だけの拗が許されている。それ以外で第四字が拗することは極めて稀であるか、意識的に律詩の格律から離れようとする古風式の律詩の場合にすぎない。

いま第四字拗に関する句式が、四律句でどのように出現するかを単句次元に戻してみると、つぎの表ようになる。ただしこの表で律兆や王力を（ ）でくくっているのは、元來、聯単位で考察されたものを敢えてここで単句単位に還元しているからである。それらは拗句が単句で自由に出現しようと考えているわけではないことに注意しておく必要がある。

z a [ 4 ]	××○××	約 2回	律兆 (王力)	
z a [ 1・4 ]	○×○××	約 1回	律兆 (王力)	
z a [ 3・4 ]	×××××	約 1回	律兆 (王力)	#1
z a [ 1・3・4 ]	○××××	約 4回	律兆 (王力)	
z b [ 4 ]	○○×○○	0		
z b [ 1・4 ]	×○×○○	0		
z b [ 3・4 ]	○○○○○	0		
z b [ 1・3・4 ]	×○○○○	約 1回	※王維「終南別業」	
p a [ 4 ]	○○○○×	0		
p a [ 1・4 ]	×○○○×	約 1回		
p a [ 3・4 ]	○○×○×	約38回	(律兆・王力)	#2
p a [ 1・3・4 ]	×○×○×	約 6回	(律兆)	#3
p b [ 4 ]	××××○	0		
p b [ 1・4 ]	○×××○	0		
p b [ 3・4 ]	××○×○	約 1回	※王維「終南別業」	#4
p b [ 1・3・4 ]	○×○×○	0		

#1 <唐詩選中甚だ稀> #2 <唐詩選中50余句> #3 <律詩に最も少し>  
 #4 <唐詩選中甚だ稀> (以上 < > 内は鈴木松江前掲書の指摘)

この表からまず p a [ 3・4 ] を除いて、第四字拗がいかに少ないかがわかる。なんらかの形で第四字目を拗するものは『唐詩三百首』では約19句。第四字拗の中で突出する p a [ 3・4 ] を入れても約56句で、前述の第三字拗よりもさらに少なくなっている。

また上句と下句で極端な差があり、下句での第四字拗は基本的に無いといってもよい。表中で0としか書いてない空白の目立つ句式は、『唐詩三百首』にはゼロ、『詩律兆』も用例を載せず、王力も拗救型として認めておらず、鈴木松江も『唐詩選』中から用例を出していないもので、極端に用例の少ないものと考えてよい。z p、p b の下句の欄はほとんどそういう空白になっている。ただ z b [ 1・3・4 ] と p b [ 3・4 ] に一例ずつ出てくるが、これは全篇平仄の乱れた、とても律詩とは認め難い例外的な「律詩」で、本来数に入れなくてもよいものである。このように第四字拗は基本的に上句で出現し、下句（押韻句）では出現しないということになる<sup>[20]</sup>。この点では今までの第一字拗・第三字拗が、用例は少なくとも一応すべてのパターンで出現しえたのとは異なる（×○××○を除く）。

平起律聯の上句 p a の第四字拗は、本句自救で拗救する場合しか認められていないが（子類特殊形式）、この表でもそのことがよく現れている。救拯しない単独の拗である p a [ 4 ] は出現数ゼロで、右欄は空白となっている<sup>[21]</sup>。

第四字拗といっても、本句自救の p a [ 3・4 ] が約38句と圧倒的に多く、対句相救型の z a [ 4 ] 及びその派生型は8で約五分の一弱にすぎない。その p a [ 3・4 ] の出現数の多さは、z b [ 1・3 ]、z b [ 3 ] などの個別の第三字拗よりもかえって多いほどである。

次に第四字拗を聯単位で見してみる。『詩律兆』に載せる句式、及び『漢語詩律学』が拗救として認める句式すべてを次表に掲げてみた。回数は『唐詩三百首』のものである。

表中第一欄の対句相救型の第四字拗は、少なくとも下句の第三字で救うという z [ 4-3 ] の要素がありさえすれば、あと第一字拗・第三字拗はどのような出現の仕方をしても自由である（この際押韻句の第二字孤平はありえないので心配は無用）。それを簡潔な式で表すと z [ 1w・3x・4-1y・3 ] (w,x,yは任意に0または1) と表記できる。この z [ 4-3 ] のすべての派生型が、王力と『詩律兆』に認められているのは、前節で述べたように第一字拗、第三字拗の自由な発生の仕方からして極めて妥当だと言える。

表中第四欄の本句自救型の第四字拗の基本型は、p [ 3・4-0 ] であ

z [4-3]	××○××、○○○×○	約 2回	律兆	王力
z [4-1・3]	××○××、×○○×○	0	律兆	王力
z [1・4-3]	○×○××、○○○×○	0	律兆	王力
z [1・4-1・3]	○×○××、×○○×○	約 1回	律兆	王力
z [3・4-3]	×××××、○○○×○	0	律兆	王力
z [3・4-1・3]	×××××、×○○×○	1	律兆	王力
z [1・3・4-3]	○××××、○○○×○	0	律兆	王力
z [1・3・4-1・3]	○××××、×○○×○	約 3回	律兆	王力
z [1・3・4-1・3・4]	○××××、×○○○○	約 1回	※	
z [4-0]	××○××、○○××○	0	律兆	
z [1・4-0]	○×○××、○○××○	0	律兆	
z [3・4-0]	×××××、○○××○	0	律兆	
z [1・3・4-0]	○××××、○○××○	0	律兆	
p [3・4-0]	○○×○×、×××○○	約18回	律兆	王力
p [3・4-1]	○○×○×、○××○○	約20回	律兆	王力
p [3・4-3]	○○×○×、××○○○	0	律兆	
p [3・4-1・3]	○○×○×、○×○○○	0	律兆	
p [1・3・4-0]	×○×○×、×××○○	0	律兆	
p [1・3・4-1]	×○×○×、○××○○	約 4回	律兆	
p [1・3・4-3]	×○×○×、××○○○	0	律兆	兆附
p [1・3・4-1・3]	×○×○×、○×○○○	約 2回	律兆	兆附
p [1・3-3・4]	×○×××、××○×○	約 1回	※	

※王維「終南別業」

るが、これも上と同じように、本句の第三字で救うという最低条件を満たしておれば、第一字拗と第三字拗は自由に出現しうるはずである。それを式で表すと  $p [1w \cdot 3 \cdot 4 - 1x \cdot 3y]$  ( $w, x, y$ は任意に0または1) となる。『詩律兆』がこの式で表される  $p [3 \cdot 4 - 0]$  の派生型すべてを認めているのは、上の対句相救型の経緯から言っても、前節で述べた第一字拗と第三字拗の現れ方から言っても、極めて原則的且つ妥当である。この点、王力は出現数の多い  $p [3 \cdot 4 - 0]$  と  $p [3 \cdot 4 - 1]$  しか認めていない。これは、拗句を律詩として認めるか否かは出現頻度の高さが決め手という考え方に拠るものであろうが、『詩律兆』の原則的な処理の仕方が初学者には受け入れやすい。やはり、すべての派生型を認めるほうがよいであろう。

ちなみに『詩律兆』のみが取り上げる  $z [1x \cdot 3y \cdot 4 - 0]$  ( $x, y$ は任意に0又は1) は第四字拗を救わない型である。『詩律兆』も非常に少な

いとコメントするが、第四字拗で救わないものも現実では絶無ではないことを知っておくために、一応ここに掲げておくことにする。

### （九） 第五字拗

第五字は、これを拗すると句末の平仄交替や、一韻到底などの押韻の大原則を破り、たちまち律詩の資格を失ってしまう。だから律詩には普通は第五字拗はあり得ない。但し、首句入韻の詩の首句だけは例外である。

ところで首句入韻の詩の場合、これを句末の平仄交替が乱れるという点に着目すれば、特殊な第五字拗と見なすことも出来る。そこで首句入韻式を、小論では便宜的に第五字拗の項で説明しておくことにする。

首句入韻の詩とは次のようなものである。

本来、仄起式の前半は、

××○○×、○○××○。 （第一聯）

○○○××、×××○○。 （第二聯）

となっているのだが、首句を入韻させるためには、z a 律句××○○×の代わりにp b 律句×××○○を持ってこなければならない。すると前半は、

×××○○、○○××○。 （第一聯）

○○○××、×××○○。 （第二聯）

となる。このとき第一聯だけ句末交替が乱れるが、二四不同、反法、粘法などは守られている。平起式でも同じ要領で、首句のp a 律句○○○××が、z b 律句○○××○に入れ替わるにすぎない。第一聯には必ず律句どうしを用いるのではあるが、句末交替が乱れるという点で律聯としての組み合わせ方ではなくなるにすぎない。

このように見てくると、首句入韻の詩というものを、首句第五字を拗したためにもう一つの平声韻律句で一句全体をすげかえるという、特殊な救拯の方法を用いたものと言い換えることが出来るかもしれない。

### （十） むすび

以上から、第二字目、第五字目を拗すれば、律詩としての資格を失うが、第一字拗はほとんど自由、第三字拗は基本的に自由、第四字拗も半分強は自由と言うことがわかった。やや乱暴な言い方をすれば、律詩といえども第一字、第三字、第四字は拗し得るわけである。このように律詩の平仄式がここまで揺らいでくれば、一体律詩とはなにか、律詩たることの最低条

件は何かということが問題になってくる。

ここまでの筆者の立論の基礎は、『唐詩三百首』と『詩律兆』巻一卷二であった。ここには一つ重要なことがあるが、それは失粘した拗体は一首もないということである。そういう大前提のもとで第一字拗、第三字拗、第四字拗が比較的ゆるやかに認められていたのである。

ところが『唐詩選』や『詩律兆』巻三には、失粘した拗体が律詩としても収められている。それら拗体の詩は、聯単位で見ると、二四不同、反法がほぼ完全に守られたきれいな律聯で、単句単位でみても、拗したにしてもおおむね第一字拗（たまに第三字拗）までで、かなりきれいな律句である。つまり『唐詩選』や『詩律兆』巻三が失粘の拗体を律詩と認める時の条件は、律聯・律句が基本的に出来あがっているということである。

以上のことから律詩の最低条件には次の二つの場合があると言える。

第一の場合は、第二字目と第五字目が拗しないなら、つまり反法・粘法・句末交替がきちんと守られていれば、あとは第一字、第三字、第四字はどうであっても律詩として認められるということである。極端に言えばそうなるのだが、もちろん押韻句の第二字孤平や第四字拗は可能な限り救われていなければならない。言い換えれば、第一字拗、第三字拗、第四字拗の激しい拗句が律詩として認められるためには、最低、反法、粘法はしっかり出来ていなければならないということである。

第二の場合は、上と逆に反法、二四不同、句末交替が守られておれば、つまり律聯、律句の基本条件が満たされていれば、その律聯の結合の仕方、即ち粘法が乱れていても律詩（ある特殊な拗格）として認められるということである。言い換えれば、失粘体が律詩として認められるためには律句、律聯がしっかり出来ていなければならないのである。

ここで、上の二つを時代の流れのなかで、おおざっぱに捉えれば、第二の場合の律句、律聯は出来ているが粘法はダメというのは、初唐（齊梁）か、もしくは後に初唐風をまねたもので、第一の場合の粘法は出来ているが拗句が多すぎるとするのは、盛中唐以降というように言えるであろう。後に意識的に律詩の格律をくずすことがあると言っても、それは上の第一の道か、第二の道かの二つしかない。唐詩の選集の基準が編者によって異なるのも、畢竟この二つの立場の違いによる。

さらに第一の道と第二の道の最大公約数を取り出すと、反法と句末交替が出てくる。聯単位でこれが守られていないと律詩でなくなると考えてよい。律詩のエッセンスは律句にあるよりは律聯に、しかも一聯内の二五の問題に還元されてくる。二五の平仄が重要だということは、五律が句法上、

二・三で切れることと対応しているであろうし、このほかにも五言律詩の成立・構造を考える上で、何か重大な示唆を与えていると思われる。これらについては、今後の課題としたい<sup>[22]</sup>。

（一九九二年八月三十一日）

〔注〕

- 【1】松尾善弘氏も既にこの点について「基本型を図式化する時に、平でも仄でもよいという代用印（●など）で説明するのは却って読者の理解を妨げ混乱させるものになりかねない。まずは基本型を明示し、実作の際に起こりうるさまざまな変化型は付带的に補足説明すればいいのであって、この両者を一挙に図示しようとするため却ってわかりにくくしている嫌いがある。言い替えると、これまでいわば平仄について整然たる解説がなされてこなかったことの一つの証左でもあるのだ。」（「近体詩の平仄式と対句法について」『鹿児島大学教育学部研究紀要／人文・社会科学編』第三九 一九八七年三月）と述べられており、私は氏の方法に大賛成である。ただ、氏は押韻字を◎や●の記号を用いて他と区別しておられるが、私はそれも必要ないとする。なぜなら、基本型の場合、偶数句末は当然韻脚であり、首句入韻の場合も首聯の上下句末が同じ場合は、自ずと首句入韻だとわかるからである。よって、近体詩平仄式の基本型を示す場合、平声と仄声を表す二種類の記号があれば、十分だということになる。
- 【2】飯田利行『漢詩入門韻引辞典』（柏書房 一九九一年）八五頁 但し小論では一聯を一行とした。
- なお、記号を用いた平仄配置の図式化は、王士禎『律詩定体』に始まるとされる（啓功『詩文声律論稿』四頁）。その後には、趙執信『声調譜』、『声調後譜』、翟翬『声調譜拾遺』、董文煥『声調四譜図説』などがあるという（蔣紹愚『唐詩語言研究』四七頁）。
- 【3】また例えば、簡明勇『律詩研究』第十四頁（文史哲出版社 一九九〇年）では、五言仄起正格（前四句）は、
- + | × - | , × - | | - 。 + - × | | , + | : - - 。
- （- は平、| は仄、+ は平仄互換可能、× は必ず平で互換不可、: は必ず仄で互換不可）と図式化される。
- 【4】王力『漢語詩律学』（香港中華書局版 一九七三年）第七節～第九節、九十頁、一〇八頁。
- 【5】反法、粘法、句末交替の原理以外に、四律句の一二同、二四不同、三五不同の原理を知っておれば、この四律句は丸暗記しておかずとも、自動的に導き出す

ことはできる。しかし、この方法はやや時間がかかり実用的とは言えないので、ここでは採用しないことにする。

- 【6】この場合、五律は原則として平声韻なので、上句末に仄声字が、下句末に平声の韻字が来る。従って、上下句を入れ替えた

$$\left[ \begin{array}{l} \bigcirc\bigcirc\times\times\bigcirc。 \\ \times\times\bigcirc\bigcirc\times、 \end{array} \right. \quad \left[ \begin{array}{l} \times\times\times\bigcirc\bigcirc。 \\ \bigcirc\bigcirc\bigcirc\times\times、 \end{array} \right.$$

のような聯は普通は存在しない。また首句が韻を踏む場合が稀にあるが、その時は首聯のみが、

$$\left[ \begin{array}{l} \bigcirc\bigcirc\times\times\bigcirc、 \\ \times\times\times\bigcirc\bigcirc。 \end{array} \right. \quad \left[ \begin{array}{l} \times\times\times\bigcirc\bigcirc、 \\ \bigcirc\bigcirc\times\times\bigcirc。 \end{array} \right.$$

となる。このように首句入韻の型は句末交替の原則が乱れるので、第五字拗のところ、例外事項として取り扱うことにし、ここでは拗句を検討する際の基準となる、完璧な律詩の原則をまずしっかり押さえることを課題とする。

- 【7】第二字目と第四字目の両方に着目する説もあるが、第四字目は後述するように拗する場合があるので、第四字目は含めない方がよい。これは次の粘法の場合も同じである。

- 【8】王力は四律句を a b A B で表わし、大文字は平声句末、小文字は仄声句末、a A は仄起、b B は平起とする。蔣紹愚『唐詩語言研究』（中州古籍出版社、一九八九年）は、五律の基本である仄起絶の構成律句を、そのまま順に甲乙丙丁と命名している（二二頁）。これらはいずれも句単位で、四律句にそれぞれ特定の背番号を振り分けるやり方である。しかしこの方法よりも、律詩はまず聯単位でとらえる方が、先にも触れたように、より効率的である。律詩の基本的な構成要素が、実際には律句であるよりも律聯であることは、「むすび」の所でもふれている。

- 【9】『唐詩三百首』は、邱燮友注訳『新訳・唐詩三百首』（三民書局 一九八一年）を用いた。

なお表中の z a、z b、p a、p b でそれぞれの総計が違ってくるのは、〔3・4〕、〔1・3・4〕など第四字拗関係を入れていないからである。

- 【10】平起律聯をつくる p a [〇〇〇××] と p b [×××〇〇] について見ると、純粋な律句の出現数よりも第一字拗のみの拗句の出現数のほうが多い。これは純粋律句でありながらも、その句式が不安定で、模範句式としてはあまり拘束力が無いことを意味している。その拗し方を見てみると、いずれも平または仄が三連するリズムを壊す方向にあることがわかる。これは、五言律句〇〇〇××、×××〇〇の平仄リズムが成立する時点で働いた美学的原理が、後の運用では忘れられがちであることを示唆している。これは第四字拗の子類特殊形式

五言律詩の平仄式、及び拗句について（古川）

についても同じである。

【11】王力、前掲書、九九頁

一方、蔣紹愚は、翟翬『声調譜拾遺』と中井竹山（積善）『詩律兆』から十一例を拾い上げている（前掲『唐詩語言研究』五三頁）。また鈴木松江（鱸玄淳）『唐詩平側考』巻上（鳳出版、日本詩話叢書第一巻所収）は、『唐詩選』の五言の律・排律・絶句、「凡そ一百八十余首の中、この病を犯す者一句も見ず」、『唐詩品彙』でも「五言絶、仄韻を除いて、其余四百余首の内、此病僅か一、二句のみ」と言う。（但し、江戸漢詩人にはこの病を犯すものが少ないという）

【12】王力、前掲書、八五頁

ちなみに拗句の z b [1] ×○××○を〈孤平〉と呼ぶのが本来的な呼び方であるが、下三字の孤平などと広い意味で用いている人も少なくない。小論では、平が仄に挟まれている状態を広く指して孤平と呼ぶことにする。

【13】松尾幸忠氏の労作「杜牧七言律の特色」（『中国文学研究／早稲田』第十三 一九八七年十二月）の調査結果を参照させてもらえば、特別に破格の多いと言われる杜牧でも、五律の失対（第二字目）は、次の一例のみである。「秋岸」（『全唐詩』巻五二四）の第一聯「河岸 微 退落、柳影 微 彫疏」○×○××、××○○○ p [2-3] 第二聯以降は、z [1-0] p [1-0] z [1-0] となり、きれいに整っている。

【14】王力の失対七例を検討してみると、本文で取り上げた儲光羲「京口 送別 王四 誼」と杜甫「憶弟」の他、王維「闕題」は、絶句であって律詩ではなく、韋応物の「簡盧陟」と「新秋 夜寄 諸弟」は、あまりにも失対がひどすぎて、ほとんど律詩と認めることが出来ず、劉禹錫の「春有情篇」は楽府体だから除外すべきで、「送 河南 皇甫少尹 赴 絳州」は本集に拠れば文字の異同があって失対とならない。このように実際には七例中、失対は儲光羲・杜甫の詩だけとなる。しかも儲光羲は律詩と認め難いので、失対した律詩というのは杜甫だけとなる。

【15】これは通説となっているのだが、以下の論著が特に参考になる。高木正一「六朝における律詩の形成」（『日本中国学会報』第四集 一九五三年） 高島俊男「初唐期における五言律詩の形成」（『日本中国学会報』第二五集 一九七三年？） 松原朗「初唐期における五言排律の形成をめぐる」（『中国詩文論叢／早稲田』第一 一九八二年） 徐青『古典詩律史』（青海人民出版社 一九八二年） 褚斌傑『中国古代文体概論（増訂本）』（北京大学出版社一九九〇年）

【16】鈴木松江の調査によれば、p b [3] ××○○○が『唐詩選』五律67首中2首のみ、p b [1・3] ○×○○○が排律中で1首のみということになる。

- 【17】同じ句式なのに、詩律兆と詩律兆附の両方が記してあるのは一見矛盾するかのようであるが、中井積善はそれぞれの句式をどの聯で出現するかで細分しているためである。例えば、p [1-1・3]、p [0-1・3]、p [0-3]、の起聯は詩律兆本篇に収録され、韻聯は篇末の詩律兆附の項に収録されているという具合である。また下三平か押韻句の第二字孤平は、おおかた詩律兆附に入れられている。
- 【18】このことは、第四字拗の対句相救型 z [4-3] の上に、第一字拗と第三字拗を対句相救的に重ね合わせた z [3・4-1・3] (公認) とも言える。[4-3] の時は、××○××、○○○×○と、平仄の均衡が5:5に保たれていたのが、[3-1] を重ね合わせた結果、×××××、×○○×○となり、平仄が3:7になってしまっている。
- 【19】啓功氏も「拗→救」という通説に懐疑的で、次のようなユニークな考え方をしておられる。……拗救とは言っても、実際は下句自身も拗しているのだから、上句を救うことなど出来ない。拗の程度が「倍」になったという方がより適切。下句も拗すれば、上句の拗をあまり目立たなくさせる……。 (注【2】前掲書七七頁)
- 【20】ただし、まれに押韻句でも出現することがある。それは、×××○○、○○××○で始まる仄起式首句入韻型の上句の押韻句においてである。『唐詩三百首』では、孟浩然的「望洞庭湖 贈張丞相」、「歲暮 歸南山」など。
- 【21】子類特殊形式の基本型は p a [3・4] で、第四字目を拗したら第三字目で救うのが原則である。表中の p a [1・4] は、杜甫の「奉濟驛 重送 嚴公 四韻」の第二聯「幾時 盃 重把、昨夜 月 同行」[×○○○×、×××○○]。第四字目の拗を第一字目で救っており、特異な例である。恐らく杜甫自身の新しい格律を目指そうとする意欲の試みであろう。なお子類特殊形式については、高島俊男氏の「律詩の『子類特殊形式』について」(『東方学』第四〇 一九七〇年) がある。
- 【22】なお絶句の平仄分布の調査については金子真也氏の「五言絶句の平仄について」(『中国語学』第二二九 一九八二年十一月)「統計的にみた七言絶句の平仄について」(『人文学報(東京都立大学)』第一六六 一九八四年三月)がある。
- 近体詩の平仄、拗救を論じた文献は非常に多いと思われるが、私が参照したのはそのほんの一部に過ぎない。文献検索については、一部、京都大学大型計算機センター提供のCHINA3(京都大学人文科学研究所附属東洋学文献センター編)を使用させていただいた。記して、感謝の意を表します。また貴重な助言を戴いた加藤国安氏にも御礼申し上げます。